

若年層の流出と地方の未来2 ～県内出身女性の地域移動に関するヒアリング調査結果～

研究員 近藤有紀

要旨

- ・本稿では前号に続き、「なぜ若者や女性は地域移動を選択したのか」を分析するため、地域移動を経験した県内出身女性を対象にヒアリング調査を実施した。
- ・県外就職者やUターン者とも、大学進学や就職などで県外に移動して初めて、「徳島の良さ」と「都会の不便さ」に気づいた者や、将来の子育てや親の介護などライフイベントに考慮する形でUターンを候補の一つに入れる者が目立った。
- ・「給与水準」「休日数」「年功序列」など、徳島の雇用環境を都市部と比較し、「いつか戻るかも」とUターンを先延ばしにしたり、候補から外したりする動きもみられた。都市部との雇用環境の差が、「戻りたい」と思う人を戻れなくさせている。
- ・Uターン者を対象とした調査では、県外就職者同様、県外に出て初めて徳島の良さ気づいたという意見や、サテライトオフィスや副業、起業、ベンチャーの創出など、地域に多様な選択肢が生まれたことで、Uターンに繋がったという意見が目立った。
- ・全体として、「結婚しても経済的に自立したい」という意見が大半を占めた。都市部でも企業規模や業種によっては、働く上での「男女差」を感じる者が多かった。
- ・学歴や年齢、性別に関わらず、多様な人材を受入れ、その人自身の力を最大限に活かせる環境を作り、企業が成長した分は社員に還元していくことが、地域へ人を呼び込み人口減少を緩和させる道に繋がる。

はじめに

前号（「徳島経済」112号）では、1995年以降、若年層や女性の県外流出が顕著になったことで、徳島県における人口減少や少子高齢化が加速し、新卒市場が「超・売り手市場」に変化していることを指摘した。

県外流出の中で特に顕著だったのが、若年女性の流出だ。2023年度の徳島県における転出超過数を見ても、20～24歳の女性は同年齢層の男性に比べて、1.4倍流出しており、その構造

は長らく変化していない。

また、15～29歳の転出超過数は、全体の8割以上を占める。進学や就職、転職を機に若年層が地域を移動している様子が伺える。

こうした地域移動に関する研究において、徳島県出身者を対象にヒアリングを実施した事例は少ない。そこで本稿では、特に流出の激しい若年層女性を対象にヒアリング調査を実施し、アンケート調査からは見えない地域移動の背景を探りたいと考えた。

以降の章では、第1章で県外就職者、第2章

でUターン者を対象としたヒアリング調査結果をまとめ、第3章で二つの調査から見えたことを指摘する。彼女たち一人ひとりの声や、ここで明らかとなった課題が、本県における人口減少対策の立案や新卒・転職者採用促進の一助となれば幸いである。

1. 県外就職者に対するヒアリング調査

(1) 調査概要と対象者の属性について

ここでは、就職や転職を機に県外を離れた女性が、高校時の大学選択の時点から現在まで、どのように地域移動の選択を行ってきたのか、その背景を探るためにヒアリング調査を実施した。調査概要や対象者の基本属性は図表1、2の通りである。

なお、今回の対象者は、普通科高校を卒業し、大学へ進学した20代後半の女性に限定した。前号では、大学進学率が上昇し始めた1995年頃から女性の県外転出が目立つようになった旨を指摘した。徳島県は女性の4年制大学進学率が男性を上回る全国6県のうち、最もその差が大きい地域であり、「他県に比べて進学時に女性が流出しやすい」という地域的な特性があると考えられる。実際に、ニッセイ基礎研究所の天野馨

南子氏が算出した、2023年の「20代女性社会減割合ランキング」でも、青森、長崎に次いで徳島県は全国3位と高い水準にある。進学時にどのような思いで地域移動をしたのか調査し、流出の背景にあるものを探りたいと考えた。

また前号では、高卒就職者は地元就職意向が強いものの、進学率の上昇や少子化によって、その数が減少していくことを指摘した。一方、進学率の上昇によって若年層における「大卒人口」の割合は増えている。県外就職志向の高い「大卒生」をいかに地域に取り込むかという視点も、地域の人口を維持する上では重要となる。

こうした地域特性に合わせて対象者を絞ることで、より詳細な分析をしたいと考えた。

(2) ヒアリング調査項目

個別インタビュー時には、下記の項目を抑えながら、個人の語りに合わせて質問を加える形で進めた。

【ヒアリング項目】

- ・ 高校在学～卒業時までのキャリア観
 - ① 進学地を選んだ理由
 - ② 高校卒業時までの就職観、県内企業に対するイメージ

図表1 ヒアリング調査概要

調査目的	県外転出者の若年層女性を対象にヒアリングを行い、高校、大学、就職後の各時点でUターンや就職に関する意識がどのように変化したのか、また、どのような要素が県外転出を促したのかを分析する
調査方法	個別インタビュー（Zoom、LINEビデオ通話にて実施）
調査期間	2024年6月下旬～8月下旬
対象者	17人
ヒアリング時間	各対象者ごとに50分～1時間程度

図表2 ヒアリング対象者 基本属性

性別・年齢	20代後半の女性
高校卒業後の進学地(大学)	関西圏7人、東京圏5人、四国地方3人(うち徳島2人)、中部地方2人
高校卒業後の進学先(大学設置区分)	国公立大学11人、私立大学6人
現在の居住地	東京圏8人、関西圏5人、中部地方2人、徳島以外の四国地方1人、海外1人
現在の勤務先の業種	IT企業5人、製造業4人、情報通信業3人、教育業2人、その他3人
結婚、子どもの有無	既婚者6人(うち子どもがいる者1人)
出身地	徳島市7人、県東部9人、県南部1人

- ③ 大学卒業後のUターン意向
- ④ 進路選択に影響を与えた人物
- ・大学在学時～就職活動期間のキャリア観
 - ① 就職地を選んだ理由と
当時のUターン意向
- ・就職活動後～現在までのキャリア観
 - ① 現在のUターン意向
- ・その他代表的な発言
 - ① 企業を選ぶ際に重視した事項
 - ② 県外と徳島県の暮らしを比較して
感じた(ている)こと
 - ③ 男女差に関する発言

(3)ヒアリング調査結果

ここでは、高校、大学、就職後の時点に分けて、ヒアリング調査の結果と具体的な発言を紹介する。なお、調査結果の編纂時には、熊本県と熊本県立大学が2022年に実施した「女性が住みたくなるスタートアップ事業 調査報告書」の記載方法を参考にした。

具体的な発言の下部には、その項目に応じてヒアリング対象者の基本属性を一部抜粋して記載した。一部の対象者の居住地については対象者が所属する大学や企業の本拠地と、対象者が通うキャンパス地や配属先が異なる場合があった。そうしたケースについては、対象者の語りから本人が本拠地としたい地域を個別に判断し、いま現在や大学在学時の居住地ではなく大学や企業の本拠地を居住地とした。

■高校在学～卒業時までのキャリア観

①進学地を選んだ理由

17人のうち、進学を機に県外へ転出した者は15人であった。

進学地を選んだ理由をみると、進学先を決める課程で「大学で学べる内容を優先した」者は9人、「県外へ移動することを優先した」者は8人であった。(なお、元々県外志向であったが、偏差値や親の意向の関係で徳島を含む四国への進学を決めた者は「県外へ移動することを

優先した」と判断した)。

前者の意見では「学びたい学部が県内になかった」という意見が、後者では「都会への憧れが強かった」という意見が目立った。また共通して「文系の場合、偏差値の面で進学先の選択肢が少ない」「兄弟姉妹などの親類や先輩が県外に出ており、それが当然だと思っていた」という意見が複数あった。なお、調査対象者は高校時に文系であった者が多く、発言内容の傾向にやや偏りがある点は留意する必要がある。

【代表的な発言】

○大学で学べる内容を優先した者

「高校卒業後、県内で就職するつもりだったが、教師のアドバイスもあり選択肢が広がる大学進学の道を選んだ。その後、就きたい職業に関連する学部のある大学を県外に見つけて進学した。」

(関西圏へ進学)

「都会は得意でなく、徳島を出たいと特別思った訳でもないが、文系の場合、県内の進学先は教育系しかないと感じていた。せっかく行けるなら偏差値的な意味でもいいところを目指したかった。」

(関西圏へ進学)

「最終的には偏差値に合わせて大学を決めた。徳島の大学は偏差値の合う学部がなく、兄弟姉妹や先輩の姿をみて、『文系は大学進学時に外に出るものだ』というイメージもあった。また、就きたい職業に就くために、県外の学部の方が有利だと感じた。」

(中部地方へ進学)

「理系であったため県内大学の見学にも行ったが、偏差値が高く進学は難しいと感じた。その後、文系に転向し、県内より偏差値の高い県外の大学を志望するように

なった。都会への憧れはなかったが、友人が行きたいと言っていた大学が県外にあり、同じ大学を志望するようになった。」

(関西圏へ進学)

○県外へ移動することを優先した者

「兄弟姉妹が県外の大学に行ったため、高校に入る時から大学進学では県外に出るものだと思っていた。また、徳島の大学では文系の学部で行きたいと思える学部がなかった。」

(関西圏へ進学)

「都会への憧れもあり県外大学を志望していたが、偏差値の関係で似た内容が学べる徳島の大学に進んだ。当時は徳島から離れたい気持ちが強かった。」

(徳島へ進学)

「親戚が東京におり、元々県外志向が強かったため住みたい場所で志望校を決めた。どこの大学を出ても同じことを学ぶのであれば、地元じゃなくてもいいと感じていた。また、偏差値の面で県内は文系の進学先の選択肢が少なく、卒業後に文系が進める就職先も少ないように感じた。」

(関東圏へ進学)

「大阪に出たかったが、親の意向もあり県内で大学を志望するようになった。その大学のオープンキャンパスに行ったとき、学生数が少なく、自分の意向とは違う点もあると感じた。最終的には偏差値の関係で地元での大学進学が難しくなり、県外の大学を視野に入れるようになった。県外に出てみたい気持ちが当初からあったので、徳島県以外の四国の大学を選んだ。」

(四国へ進学)

②高校卒業時までの就職観、県内企業に対するイメージ

17人のうち、高校卒業時までに将来就きたい職業について「具体的な業種や職種のイメージがあった」者は11人、「大学に行ってから決めようと思っていた」者は6人であった。

前者では、親や塾講師の影響を受けたり、日常生活の中で目に触れる機会の多い職業を選んだりする者が多かった。後者では「『まずは大学進学』という気持ちがあった」という意見が目立った。全体を通して「公務員は年功序列で堅い印象があり、自分には合わないと思った」という回答が複数みられた。

また、高校卒業時までに知っていた県内企業や県内の就職先のイメージを聞くと、大半が「大塚製薬、日亜化学工業、金融関連」「教員や公務員」と回答した。ただ、前者については「大学卒業後にそこで働くイメージを持っていた」と答えた者は、ほぼいなかった。

③大学卒業後のUターン意向

17人のうち、「徳島に戻るイメージはなかった」と回答した者は5人、「就職時に戻ろうと思った」と回答した者は3人、その他の意見を回答した者が9人であった。その他の意見では、「とりあえず県外に出て考えようと思った」「戻らないと決めたわけではないが、自分のやりたい職業の選択肢が少ないとは感じていた」という回答が目立った。

【代表的な発言】

○「徳島に戻るイメージはなかった」と回答した者

「自身の就きたい仕事の経験が積める場所が徳島にはなく、Uターンを考えることはなかった。」

(関東圏へ進学)

「都会への憧れを捨てきれず、徳島に絶対残るという気持ちはなかった。徳島で絶対に入りたい、という企業もなかった。」

(徳島で進学)

「親が厳しく、親元を出て一人暮らしをしたいという気持ちが強かった。」

(中部地方へ進学)

「徳島に戻るイメージはなかった。兄弟姉妹も県外で就職・結婚しており、そのイメージが強かった。徳島が嫌いな訳ではないが、給料の低さ、遊ぶ場所の少なさから住んで働く姿を想像できなかった。」

(関東圏へ進学)

「徳島は働ける場所が少なく、家業をしていない限りは戻る必要がないと感じた。周りの子も家業がある子ぐらいしか、徳島に戻る話をしていなかった。」

(関東圏へ進学)

○「就職時に戻ろうと思った」と回答した者

「大学で出なければ一生出られない、という気持ちもあった。戻らないと決めていた訳ではなく、戻るとしたら就職のタイミングと考えていた。」

(関西圏へ進学)

「地域再生に興味があり、大学卒業後は徳島に戻ろうと思っていた。自分が生まれ育った町だからこそ、身を入れて課題解決ができると感じていた。」

(関西圏へ進学)

「親から『就職は帰ってくるよね』と言われていた。『大学4年間だけ外に出よう』という思いだった。」

(四国へ進学)

○その他の意見

「県外に出てもっと色々見てみたいと思った。徳島が嫌いな訳ではなく、自分のなりたい職業は東京や都市部にしか就職先がないイメージが強かった。」

(中部地方へ進学)

「親は就職のときに戻ってきてほしいと思っていたようだが、自分自身は『大学に行く』という目標を達成することが先と思い、卒業後のことは深く考えなかった。」

(関西圏へ進学)

「戻らないと決めていた訳でもないが、『もう少し先に決めようかな』と思っていた。」

(関西圏へ進学)

「教師になるなら徳島に戻る道もあると考えていたが、自分がなりたい分野の枠が狭く、それがネックになっていた。『一般企業に就いてからでも遅くはない』という気持ちもあり、民間企業での就職も視野に入れていたが、徳島ではやりたいと思える仕事を見つけることが出来なかった。最低賃金も低かったため、徳島で企業に就職することは難しいと考えるようになった。」

(関西圏へ進学)

④進路に影響した人物(親、教師など)

17人のうち、最終的な進路選択に影響した人物として「親」を挙げた者は5人、「高校教師」を挙げた者は4人、自分自身で選択した者が8人であった。

親の意向としては、「県内に残って欲しい」と勧めるものや、逆に「県外に行った方がいい」とアドバイスをするものなど、家庭によって動きが分かれた。

高校教師の指導内容については、「『県外に行った方がいい』と言われた」「偏差値に合わせて大学を選んでくれた」との意見が目立った。

また、高校教師の影響を受けた者や、自分で進路を決めた者は、親の意向について「放任主義」「『やりたいようにやりなさい』と言ってくれた」と発言することが多かった。そのほか、進路自身は自分の意向や親の意向で決めながら、親、高校教師、塾講師の意見を参考にしたという者も目立った。中には、親や教師の影響で高卒就職や専門学校への進学から四年制大学への進学に転換した者もいた。

【代表的な発言】

○「親」に影響を受けた者

「母親から同じ仕事を勧められ、自分自身も収入が安定していて良いと感じたため、その仕事のための資格が取得できる大学を選んだ。ただ、最終的にその職に就くイメージまでは持っていなかった。資格を取れば将来の選択肢の一つになると思って。志望校は自分で選んだが、第二、第三志望については、先生から『同じ偏差値の学校なら、四国の大学の方が親御さんも安心する』といった助言を貰って決めた。」

(関西圏へ進学)

「親から『寂しい。近くにいて欲しい』と言われ、県内大学を志望していたが、偏差値の関係で県外への進学に変えた。県外に変えたのは、反発の気持ちもあったと思う。」

(四国へ進学)

「親は放任主義だが、進路選択だけは『県内に残って欲しい』という意向があった。自分自身は県外に出たい気持ちが強かったが、偏差値の関係もあり、県内大学への進学を決めた。高校の先生は、自分の偏差値に合わせた大学選びを手伝ってくれた。」

(徳島で進学)

「県外志向が強かったが、親を県内に残すことが不安で県内の大学に進む道を選ぼうとしたこともあった。ただ、親から『親のせいで子どもがやりたいことをできないのが、一番しんどい』という言葉が貰い、県外に出ることを決めた。興味のある職業があり、高卒就職や専門学校への進学も考えたが、『四年制大学に行った後でも遅くないと思う。高校や大学で選択肢を狭めず、就職先が多様な大学に行ってもいいのでは』と親からアドバイスを受け、考えを変えた。」

(関西圏へ進学)

「母親自身、『徳島から出たかったが、出れなかった』という気持ちがあったようで、『徳島は給料が低く製造業ばかりだから、県外大学で経験を積み、県外で就職しなさい』と言われていた。大学選びでは高校教師や塾講師の助言も貰ったが、先生は先生の仕事しか経験をしていないという思いもあり、就職に関するアドバイスはあまり参考にしていなかった。」

(関西圏へ進学)

○「高校教師」に影響を受けた者

「高卒就職を志望したが、教師から『大学に行った方が選択肢は広がる』という指導を受け、大学進学を目指すようになった。親は『やりたいことをやったらいい』というスタンスだった。」

(関西圏へ進学)

「担任から『関東圏へ行くべき』というアドバイスがあり、同じクラスの子は関西よりも関東に行く子が多かったように感じる。『文系なら、経験の積める東京の方が良い』という助言もあった。親は放任主義で、進路選択への影響はなかった。そのほ

か、親戚が自分の仕事について話しているのを聞いて、憧れる気持ちがあった。自身の進路観にも影響を与えたと思う。」

(関東圏へ進学)

『「関東圏に行きたい」という自分の志望や学力に合わせて、志望校を選んでもらった。親は先生にお任せの姿勢だったが、父親は自分が関東圏出身ということもあり、『関東圏に一度行ってみたい』という思いもあったと思う。』

(関東圏へ進学)

「何度も高校の先生に相談に乗ってもらった。はじめに志望校を見つけて相談したとき、後押しをしてくれた。『外に出ないと分からないこともある』という助言もあった。親からは『進路は自由に決めていい』と言われていた。」

(中部地方へ進学)

○自分自身で選択した者

「入試の面接対策で将来の夢を決めることになり、大学も含めて自分で進路を決めた。親からは『県内に戻って欲しい』『公務員が一番いい』という意見もあったが、将来の夢は徳島で叶えられないと感じていたことや、親の干渉から離れたいという気持ちもあり、県外への進学を決めた。」

(中部地方へ進学)

「親は寛容でやりたいことを応援してくれた。就きたい職業について別の職を提示されたこともあったが、自分の希望が変わらなかったため、次第にそうした話も出なくなった。」

(関東圏へ進学)

「自分が行ける中で偏差値も含めて一番いい大学を選んだ。親は『一度出て就職のときに戻ってきて欲しい』と思っていたかもしれないが、自分自身は大学に行ってから決めようと思っていた。」

(関西圏へ進学)

「母親からは『県外出るなら出るで、皆知っているいい大学や企業に入って欲しい』と言われていたが、反発の気持ちもあり進路は自分で選んだ。父親からは学部選びで助言を貰った。」

(関東圏へ進学)

「親からは『好きなようにしたらいいし、しんどかったら帰ってきてもいい』と言われていた。自分の方が心配で、地元に近い関西圏での進学を選んだ。」

(関西圏へ進学)

■大学在学時～就職活動期間のキャリア観

①就職地を選んだ理由と、当時のUターン意向

17人のうち、「徳島に戻ることも視野に入れていたが、最終的に県外就職を選んだ」とした者が10人、「徳島の企業の情報収集はしなかった」と答えた者が5人、最終的に徳島を含む四国に戻った者が2人であった。

「徳島に戻ることを視野に入れていたが、最終的に県外就職を選んだ」者は、全体として「関西や関東の企業を中心に選考を受けていた」「徳島の企業も一応見ていた」「県外で採用が出たため内定を辞退した」「徳島ではやりたい仕事ができなかった」という発言が目立った。また、徳島で情報収集をしていた企業は、県内の大手企業かつ「高校生の頃に知っていた企業」が大半であった。

17人のうち、進学先の近くのエリアで就職した者は9人（うち関東3人、関西4人、その他の地域2人）、就職を機に徳島を含む四国以外の地域へ移動をした者は6人（うち関西→関東2

人、徳島を含む四国→関西3人、その他1人)、就職を機に徳島を含む四国へUJターンをした者が2人であった。

【代表的な発言】

○「徳島に戻ることを視野に入れていたが、最終的に県外就職を選んだ」者

「大学で学んだ内容を活かせる仕事を探していた。親に進められて徳島の企業の採用も受けたが、裁量権がないことが気になり途中で辞退した。結局、自分で見つけた関東の大手企業に就職した。」

(文系学部、関東圏へ進学・就職、IT企業(管理部門))

「就きたい職業があり、県外を中心に就職活動を行っていたが、採用枠が少なく、保険として同業種の県内企業の採用試験を受けていた。最終的に希望した業種で内定をくれた県外の会社に入社した。」

(文系学部、中部地方へ進学・就職、情報通信業)

「もともと教員になる道も視野に入れていたが、大学に近いエリアの説明会にたまたま参加した際、就職先の人と仲良くなり、そのままその土地での就職を決めた。徳島の採用試験を受けることも検討したが、教育実習などを経てその仕事に一生携わることはできないと感じた。」

(文系学部、関西圏へ進学・就職、初職は福祉関連業)

「東京も就職先の選択肢の広さから視野に入れていたが、東京に行った際に満員電車などを体験し、都会での暮らしに抵抗感を覚えるようになった。その後、関西中心に就職活動を行い、徳島の企業の選考も受けたが、元々知っていた企業にたまたま良い

印象を感じて応募しただけで、積極的に徳島での就職先を探した訳ではなかった。最終的に、先に内定を貰えた関西の企業に入社した。」

(文系学部、関西圏へ進学・就職、製造業)

「関西を中心に、関東や徳島の企業にも応募した。徳島の企業は新卒採用数の母数が少なく、内定が貰えるか不安に感じた。また、高校の頃に興味を持っていた県内の仕事を調べると、給与や福利厚生、休日数の水準が県外に比べて低く驚いた。仕事があり自立できるのであれば徳島で就職してもいいと思っていたが、難しいと考えるようになった。」

(文系学部、関西圏へ進学・就職、製造業)

「東京が第一志望だったが、関西の企業も視野に入れていた。徳島の企業はインターンに行った会社のみ、採用担当に勧められるまま選考に進んでいた。県内に戻るつもりはあまりなく、他の県内企業は調べていない。仕事の選択肢が少ないイメージがあった。仲のいい友達の多くが県外就職を選んでいたり、『帰りたくなったらいつでも帰れる』という思いもあり、最終的には県外の大手企業で就職することを選んだ。高校の頃からなんとなく、『就職では大手企業に入る』という思いもあった。」

(文系学部、中部地方へ進学→関東圏へ就職、初職は旅行関連業)

「県内企業のインターンに2社ほど行ったが、顧客との関係性が地方特有の関係性に見え、東京と同じような働き方は出来ないと気付いた。県内で働いて年を重ねることに抵抗感を覚えるようになり、就職活動時には地元に戻りやすい関西を中心に、選択肢を広げるため関東も視野に入れて情報を集めるようになった。現在の勤務先は大学

内の説明会で知り、ワークライフバランスを重視した制度に惹かれ、入社を決めた。」

(理系学部、徳島を含む四国へ進学→
関西圏へ就職、IT企業)

「東京、大阪を中心に、徳島も少しだけ選択肢に入れていた。就職エージェントを主に活用して就職活動を進めていたが、徳島の企業の紹介はなかった。そのため、徳島の企業については自分でも情報収集を行ったが、『やりたいこと』ではなく、『親のために有名な企業に入社すること』が目的になっていると感じるようになり、最終的には興味のある仕事ができる関東圏の会社を選んだ。」

(文系学部、関西圏へ進学→
関東圏へ就職、商社)

○「徳島の企業の情報収集はしなかった」者

「自分が学んだ内容を活かせる企業は徳島になく、東京・関西の方が選択肢は広いと感じた。もし徳島で、出張や転勤など県外と関わる仕事があれば選択肢に入ったかもしれない。ただ、そうした情報を検索したことはなく、説明会にも徳島の企業は来ていなかったのだから分らなかった。」

(理系学部、関東圏へ進学・就職、製造業)

「仲のいい友達が関西・関東の大手企業や有名企業の選考を中心に受けていたため、それに続く形で大阪と東京の企業情報を集めるようになった。特にやりたい仕事があった訳ではなく、説明会に来た企業から就職先を絞っていったが、徳島の企業が大学近くの説明会に来ることはなかった。」

(文系学部、関西圏へ進学・就職、
初職は情報通信業)

「大学の産学連携の一環で現在の勤務先のワークショップを受講した際、就職の勧誘があった。関西配属と思っていたが、最終的な配属地は本社のある東京になった。大阪か東京のどちらかで働けばいいと思っていたため、そのまま入社した。就きたい職業は徳島では給与が低いイメージがあり、就職時は県内企業を選択肢に入れていなかった。」

(文系学部、関西圏へ進学→
関東圏で就職、情報通信業)

○進学を機に四国へUJターンをした者

「高校から大学まで徳島を含む四国で働きたいと考えており、その意向は変わらなかった。ただ、就職先がなかなか決まらない中で県外の企業も視野に入れてはいた。」

(文系学部、関西圏へ進学→徳島を含む
四国へ就職、旅行関連業)

「自分が知っている企業が集まっていたことや、生活面での便利さから、東京や関西圏を中心に採用活動を行っていた。ただ、『全国転勤無し』の条件では内定をもらえず、視野を広げたところ、たまたま全国転勤のある四国の企業から内定を貰えた。知っている企業が県外に多くある中で、わざわざ他に徳島の企業を調べて選考に進もうとは思わなかった。」

(文系学部、関東圏へ進学→徳島を含む
四国へ就職、初職は製造業)

■就職活動後～現在までのキャリア観

①現在のUターン意向

17人のうち、「生活基盤が県外にできたため、Uターンは考えていない」とした者は4人、「いつか戻るかもしれない」とした者は4人、「現在も、徳島の企業の情報を検索することがある」とした者は4人、「就職や転職時にUターンをした結果、都市部に移動した」とした者は2人、「就職後、徳島に戻ることを考えたことはない」とした者が2人、「徳島を含めた四国で今後も働きたい」とした者が1人であった。

【代表的な発言】

○「生活基盤が県外にできたため、Uターンは考えていない」とした者

「結婚を機に家を購入し、子どもやペットもいるので、今の居住地から動くつもりはない。また、現在住んでいる地域は、子どもの医療費無料制度など子育てに関する制度が整っている。勤務先も子どもが小学校になるまで時短勤務が出来たり、男性も最低1か月～最大1年ほど育児休暇を取っていたりと子育てに寛容な企業風土がある。徳島はそうした企業が少ないイメージがあり、戻るための大きな理由がない。」

(徳島を含む四国へ進学→関西圏へ就職、IT企業、既婚)

「就職当初は大阪で数年働き、家族が出来たら徳島に戻ろうと考えていた。その後、結婚を考えていた相手の転勤に伴い、自分も東京に引っ越し転職をしたが、将来の子育てや親の介護を考えると徳島に帰りたと思うようになった。結婚後、夫にも相談したが、仕事の面で難しいという話になり、今は東京で生活基盤も出来たので、徳島に戻ることは難しいと考えている。」

(徳島で進学→関西圏へ就職→関東圏に転職、IT企業、既婚)

○「いつか戻るかもしれない」とした者

「親のことを心配に思う時もあり、自分が望むキャリアを積んで、もういいかなと思ったら帰る可能性はある。兄弟姉妹も地元にいるので、とりあえず10年ぐらいは帰らないと思う。ただ、その時にもう親が亡くなっていたり、自分が結婚していたりすれば、戻ることは難しくなると思う。」

(関東圏へ進学→海外で勤務、医療業)

「親はいつか帰ってきて欲しいと言うが、自分は今ではないと思っている。ある程度は関東で仕事を楽しんで、10年か20年後に徳島に戻りたい。ただ、戻るとしても、自分に合った仕事があるのかどうか現時点では調べていないので分からない。」

(関西圏へ進学→関東圏へ就職、情報通信業)

「Uターンしたいと強く思っている訳ではないが、親の将来等を考えると、いつかは…と思う気持ちもある。ただ、親はそれを望んでいる訳ではなく、県外で結婚したこともあり現実的には難しいと考えている。親が年齢を重ねた時に理解を得られたら県外に呼んでもいいと思ってもいる。」

(関西圏へ進学・就職、製造業、既婚)

○「現在も、徳島の企業の情報を検索することがある」と回答した者

「都市部は家賃が高く子育てもしにくいイメージがあり、Uターンや2拠点生活を考える時がある。徳島の企業の情報を検索することもあるが、給料面で諦めることが多い。今と同じ仕事を続けるならフリーランスになるか起業するしか選択肢がない。」

(関西圏へ進学→関東圏へ就職、情報通信業)

「家賃などの面で都会に住むメリットが感じられず、転職地の候補に徳島は入っている。良いと思う企業もあったが、『正社員を見据えて契約社員から』という表記を見て、正社員である立場を捨ててまで申し込む気になれず、応募しなかった。」

(関東圏へ進学・就職、IT企業(管理部門))

「就職時は戻るつもりはなかったが、コロナ禍を経て地元の家族や友人の近くに居たいと思うようになった。都市部は人が多く子育てもしづらい。自然が近い環境で育てたい。夫に相談しているが、夫は関西圏の出身で、まだ理解を得られていない。」

(徳島を含む四国へ進学→関西圏へ就職、教育業、既婚)

「サテライトオフィスや起業者が増え、選択肢が広がっているのを見ると、Uターンしてもいいと思うことがある。転職を考える際に徳島の企業情報もみているが、就職活動時と同じで、やりたい職種は見つからない。仕事内容を深く知れたら、自分のこだわりもなくなるのかもしれないが、募集要項以外の情報を発信する企業は大手ぐらいで少ないと感じた。」

(関西圏へ進学・就職、製造業)

○「就職や転職時にUターンをした結果、都市部に移動した」とした者

「以前から知っていた地元企業に入社したが、自分が志望していた部署に異動できる確率は低いと感じ転職を決めた。地元で働き、その良さも感じていたが、四国ではやりたい業種の仕事が見つからず、選択肢の多い東京で転職活動を行った。」

(関東圏へ進学→徳島を含む四国へ就職→関東圏へ転職、情報通信業)

「家業を継ぐかどうかで悩み、一度徳島にUターンした時期があった。家は市内から離れており、自分の車がないと生活が大きく制限されることを実感した。家族としか過ごせない生活に孤独を感じたこともあり、地元を離れることを決めた。」

(関東圏へ進学・就職→四国へ転職→関東圏へ転職、製造業)

○「就職後、徳島に戻ることを考えたことはない」とした者

「実家が一軒家であれば家賃などのコストを抑えられるが、そうではないので徳島に戻るメリットを感じていない。進学時からずっと徳島に戻ろうと思ったことはない」

(関東圏へ進学・就職、製造業)

「初職での経験が浅く、今の会社に入社してからUターンを考えたことはない。もし結婚した相手が『徳島に戻りたい』と言えば戻るかもしれないが、しばらくは都市部でいたいこともあり、結婚はしないつもり。住みたい場所の希望としては、まず地元に近い大阪、次に現在住んでいる東京、最後に徳島。その他の知らない県に住まざるを得ないなら徳島の方がいい。」

(関西圏へ進学→関東圏へ就職、商社)

○「徳島を含めた四国で今後も働きたい」とした者

「地元貢献したい気持ちがあるが、徳島だけで課題解決することは難しいと思っており、働きたい場所は四国全体と捉えている。ただ、異動のタイミングで地元貢献と関係のない部署に配属された場合は転職を考えるかもしれない。その時は、一度県外に転職し、スキルを磨いてから戻る選択肢もあると考えている。」

(関西圏へ進学→徳島を含む四国へ就職、旅行関連業)

■その他、ヒアリング調査内で得られた

代表的な発言

①企業を選ぶ際に重視した事項

ここでは、就職や転職活動時において重視していた（いる）事項について、ヒアリング調査内で得られた代表的な発言を紹介する。

全体を通して、就職活動と転職活動時で共通して、「初任給 20 万円以上」「年間休日 120 日以上（土日祝休み）」「やりがい」「年齢に関係なく活躍できる環境」を重視すると発言する者が目立った。

また補足事項として、今回のヒアリング調査対象者は 20 代後半であり、就職活動を終えてから最低 2 年以上が経過している。足元では物価上昇に伴う賃上げが進んでおり、厚労省の「賃金構造基本統計調査」では大学卒者の平均初任給（産業計）は以下のように推移している。

	2019 年	2023 年
・東京	22 万 500 円	→ 24 万 4500 円
・大阪	21 万 100 円	→ 23 万 5600 円
・徳島	19 万 3700 円	→ 20 万 9500 円

上記の金額の差額をみると、コロナ禍前と比べて東京・大阪は 2 万 5 千円ほど、徳島は 1 万 5 千円ほど賃金が上昇している。そのため、今の新卒者は今回のヒアリング対象者が見ていた「最低でも初任給 20 万円」に 2 万円前後上乘せした額を基準としている可能性が高いことに留意する必要がある。

【代表的な発言】

○就職活動時に重視していた事項

「給与面でも『手取り 20 万円以上』という条件が叶えられる会社であったため、入社を決めた。」

（関東圏へ進学→徳島を含む四国へ就職、
初職は製造業）

「福利厚生や給料面は、仕事内容とつりが合いが取れるかどうかで判断していた。自分の興味のない仕事内容でも勤めるうちに慣れると思うが、最低でも初任給は 20 万円以上、休日はカレンダー通り欲しいと考えていた。徳島の企業の全体的な給与水準は、他県より低い印象があった。」

（関西圏へ進学・就職、製造業）

「就きたい職種以外の業種に応募する場合、職場の雰囲気や、やりがいなど、なんとなく決めていた」

（中部地方へ進学・就職、情報通信業）

「仕事内容が楽しそうだったので入社を決めた。年間休日数は土日祝休みで 120 日以上を基準にみており、初任給は 20 万円を切っていたら少ないと感じていた。住宅補助の有無も重視した。」

（中部地方に進学→関東圏へ就職、
初職は旅行関連業）

「給与より休日を重視していた。完全週休 2 日制で年間休日数は 120 日以上の会社が良いと思っていた。子育てに関する制度が充実しているかどうかも重視した。」

（徳島を含む四国へ進学→関西圏へ就職、
教育業）

「関西の企業は交通面のアクセスも良く、下積みなしで就きたい職種に携われることも魅力に感じた。県外や国外への出張など、色んな経験が出来るのも魅力的に感じた。」

(関西圏へ進学・就職、製造業)

「公務員なども視野に入れたが、ベンチャーみたいに自由に働きたいと思うようになった。年齢に関係なく評価される環境を重視していた。」

(関西圏へ進学・就職、初職は情報通信業)

○転職活動時に重視していた(いる)事項

「東京の企業はジョブ型採用で仕事の範囲が限られているが、徳島は即戦力かつ多様な経験者を求める企業が多い。転職しても負担が増えるだけと思い、応募に至らなかった。」

「徳島の企業は採用情報に募集要項しか掲載していないことが多く、どんな仕事をしているのか、自分がそこで力を発揮できるかイメージすることが難しい。都会から知らないコミュニティに移るには心理的な障壁もあるので、応募する前に具体的な情報を知っておきたかった。」

(関東圏へ進学・就職、IT企業(管理部門))

「自分のやりたい業務ができるかどうかと、裁量権があるかどうかを重視していた。転職先は平均年齢が30歳以下で、研修制度も充実している。徳島の企業は調べたことがないので分からないが、給与水準が低いイメージがある。」

(関西圏へ進学・就職→関東圏へ転職、情報通信業→IT企業)

「①職種、②年収、③若手にも裁量権があるかどうか、④仕事を通してスキルを得られるかどうか、という点を重視していた。どこの県に住んでいても、現在の年齢(20代後半)で400～450万円くらいはないと、生活することは難しいと感じる。今後のキャリアでは600万円くらいを目指したい。」

「休日数は土日祝休みかつ年間休日数が120日以上あればいいと思っていた。」

(関東圏へ進学→徳島を含む四国へ就職→関東圏へ転職、製造業→情報通信業)

「仕事を決める上では、①仕事内容(営業や人と話せる仕事)、②家から通える距離、③給与水準が下がらないかどうか、④結婚や出産を経ても働き続けられるか、という点を見ていた。」

「転職後の会社は3連休があった翌週の土曜日は出社しないといけませんが、その場合は有休をとる人が多いと聞いて入社した。今後、仕事を探すとしても土日祝休みがいいと思う。」

(関東圏へ進学・就職→四国へ転職→関東圏へ転職、派遣業務→家業従事→製造業)

②県外と徳島県の暮らしを比較して感じた(ている)こと

全体として、「住みやすさ」と「地域の寛容さ」「男女差」に触れる意見が多かった。なお、「男女差」については項目が多いため、次項にて内容を取り上げる。

徳島の住環境に対しては「車があれば住みやすい」「自然が好き」といった意見が見られ、県外に出たことで徳島を肯定的に捉えるようになったケースが多かった。逆に都市部に対しては、「家賃が高い」「親と離れており、車も使えないので子育てしにくい」「満員電車に抵抗を感じる」という否定的な意見が多数みられた。

「住みやすいのは徳島だが仕事がない」「徳島

は給与水準が低い」といった声も多くあり、こうした点がUターンの障壁になっているとみられる。

また、「地域の寛容さ」については、「コロナ禍での閉鎖的な対応」や「戻ってきた人が浮く」という点で、県内に居住する人との価値観の差があると感じているようであった。給与水準などの雇用環境だけでなく、地域外の考え方を受け入れる姿勢を県内全体で醸成することも肝要となるだろう。

【代表的な発言】

○住みやすさに関する内容

「自分の出身地は大型商業店やホームセンター、ドラッグストアなど、身の回りの買い物には不自由しないようになったと感じている。一方、地域のIT力は未だ低いイメージがある。自分がそこに入って現状を変える程の気持ちはない。」

「神山まるごと高専や未来コンビニなど、過疎地ほど頑張っていて、地元で肯定的なイメージを持つようにもなった。神山まるごと高専のような選択肢が地元であれば、進路も変わっていたかもしれない。」

「関東圏は家賃が高い一方、全ての地方にアクセスしやすく、趣味の選択肢も広がる点が良いと思う。」

(現在のUターン意向：
「現在も徳島の企業の情報を検索することがある」、関東圏で居住)

「徳島は『ド田舎』というイメージがあるが、いま現在海外で住んでいる地域はそれに近く、徳島の方が交通の便が良いかもしれない。」

「都市部は交通の便がいいが、東京は満員電車や23区の雰囲気は自分に合わないと感じた。終電を逃しタクシーで帰る人や、小さい部屋に高い家賃を払う人を見て、こ

こでは住めないと思う時がある。」

(現在のUターン意向：
「いつか戻るかもしれない」、海外で居住)

「徳島は最低賃金が低いイメージがある。もう少し給料が高いイメージがあれば戻ったかもしれない。」

「今は都市部ではないが、街中には行きやすい環境で暮らしている。電車など交通の便も良く住みやすい」

(現在のUターン意向：「生活基盤が県外にできたため、Uターンは考えていない」、関西圏で居住、既婚)

「徳島は待機児童のリスクが少なかったり、車移動がしやすかったり、親が近くにいたり、都会に比べて子育てがしやすいイメージがある。ただ、給与面で見た時に東京大阪に比べて低く、夫の仕事も含めて転職すれば年収を下げることになる。」

(現在のUターン意向：「生活基盤が県外にできたため、Uターンは考えていない」、関東圏で居住、既婚)

「徳島は景色が綺麗で気持ちが前向きになる。自分の車があれば快適。家族と一緒に居られたら楽しい。その一方で、徳島に戻るには仕事が必要。」

(現在のUターン意向：「Uターンをした結果、都市部に移動した」、関東圏で居住)

○地域の寛容さに関する内容

「コロナ禍での感染者への反応が都市部より閉鎖的で恐怖感を覚えた。徳島では働けないと感じた。」

(現在のUターン意向：「就職後、徳島に戻ることを考えたことはない」、関東圏で居住)

「徳島に戻ったとき、小中学校の同級生に会うのは気まずい。『帰ってきたんだ』と言われたくない。」

(現在のUターン意向：「現在も徳島の企業の情報を検索することがある」、関東圏で居住)

「徳島の企業は徳島出身者や県内大学の卒業者が多く、都会から戻る人が浮いてしまう印象があった。」

(現在のUターン意向：「いつか戻るかもしれない」、関西圏で居住)

「都市部に憧れたことはない。顔が見える関係性の中で暮らしたい。小さい頃から、阿波おどりの連に所属しており、社会人と過ごした時間が長かったのも関係していると思う。ただ、徳島は個人的なわだかまりなどで物事が進まないイメージもある。働く中で得られるスキルも少なく、他県で働いた方が経験は積めると思う。給与水準も他県の友達に比べて低い。暮らしていけなくはないが、結婚したら考えは変わるかもしれない。」

(現在のUターン意向：「徳島を含めた四国で今後も働きたい」、四国で居住)

③男女差に関する発言

男女差に関する発言では、一部で「進路に影響を与えた」ケースが見られた。また、全体の傾向として、現在の婚姻状況に関わらず、「結婚しても共働きをして経済的に自立したい」「時短勤務を活用しながらも正社員でいたい」という声が目立った。

働く上で感じたことや徳島の企業のイメージについては、現在勤務する県外の企業でも男女差を感じながら、「徳島の方が女性管理職は少ない気がする」「都市部に比べてパートなどをしながら子育てをしている印象がある」との発言が複数あった。育休制度や子育て環境につ

いては「徳島の方が育休・産休が取れている」と「いま住んでいる地域や会社の方が制度は充実している」など、地域や勤務先の規模業種によって発言の傾向が分かれた。

また、実家などで感じた価値観の違いから、徳島全体や徳島の企業に対しても「男女格差が都市部より強いのでは」という印象を抱く発言が複数見られた。

【代表的な発言】

○進路に影響を与えたケース

「大学院進学も考えたが、親から「女性で院卒だと就職口がない。学費面も心配。」と言われ諦めた。」

(文系学部、関西圏へ進学→徳島を含む四国へ就職)

「徳島の企業は徳島出身者や県内大学の卒業者が多く、都会から戻る人が浮いてしまう印象があった。親からも『女性で学歴があると徳島での結婚は難しくなるから戻ってこなくてもいい』と言われた。」

(文系学部、関西圏へ進学・就職)

○働く上で感じたこと、徳島の企業に対するイメージ

「四国の企業で働いた時、同じ会社内でも地域によって会社内の風土に男女差を感じるがあった。関東の支社は男女に関わらず『どれだけ働くか』で人を評価していたが、四国の支社は配属される人数的に男性の割合が多く男社会の雰囲気があった。地方の方が『女の子らしさ』を求められる気がする。」

(関東圏へ進学→徳島を含む四国へ就職→関東圏へ転職、情報通信業)

「体感ではあるが、徳島の企業は都市部に比べて女性の管理職が少なく、仕事内容も限定されているイメージがある。振り返れば、家庭内でも家事は母親しかしていなかった。今の職場で男女差を感じたことはなく、同僚も夫婦間で家事を分担する人が多い。そういう点では都会は進んでいる印象がある。」

(関西圏へ進学・就職、製造業、既婚)

「今の勤務先では、産休・育休明けで復帰した後、子どものために早く帰るのは女性で、子どもがいても遅くまで残業するのは男性という状況がある。子どもを産んだとしても正社員のまま働きたいが、そうした様子を見ると、自分が子どもを持ったときのイメージが出来ない。徳島の地元の友達も若くして子どもを産む子も多く、パートなどで働いている印象が強い。自分が同じ働き方をするのは難しいと感じる。」

(関東圏へ進学・就職→徳島を含む四国へ転職→関東圏へ転職、製造業)

「管理職は全て男性で、何かあった時に女性に相談できない。育休・産休に関する制度も固まっておらず、問い合わせる先もない。徳島にいる友達は育休・産休も取れているので良いと思う。男女差解消のため女性を優先して採用してくれる時もあり、良いところも悪いところも両方ある。」

(四国へ進学→関西圏へ就職、教育業)

「勤務先はオーナー企業で、都市部でも働く上での男女差を感じている。管理職も男性ばかりで、重要な仕事を経験でなく性別で振り分ける時がある。上司からも『女の子は辞めるから、大事なことは任せられない』と言われた。都市部でもそうなら、徳島の方が格差は強く出る気がする。」

(関東圏へ進学・就職、製造業)

「海外の長期出張に行く人を決める際、『危ないから男性の方が良い』と言っているのを聞いたことがある。『女の子だから』と気を使われることも多い。一方、男性でも最低1か月～最大1年は育児休暇を取得しており子育てに寛容な風土はある。徳島はそうした企業が少ないイメージ。(一部文章再掲)」

(四国へ進学→関西圏へ就職、IT企業)

「現在の会社は女性の数が少ないが、女性管理職比率の公表義務化に向けて、女性のキャリアアップに積極的な姿勢を感じる。ただ、女性で管理職に就く人は残業を多くしているイメージがある。もし自分が結婚して子どもが出来ても時短勤務等を使い正社員として働きたい。経済的に自立しつつ、子育ても両立出来たらと思う。ただ、今はやりたいこともあるのでしばらくは、結婚はしないつもり。(一部文章再掲)」

「徳島の企業のことはよくわからないが、実家で親戚から結婚の話題を出される時があり、東京との価値観の差を感じることもある。」

(関西圏へ進学→関東圏へ就職、商社)

○実家などで感じていること

「実家に帰ると親戚などから『女性が食事を作るのが当たり前』と言われ、聞いていて辛いと感じることがある。徳島だけではなく地方全般でそうかもしれないが、年齢が上の人ほどそうした発言が目立つ。」

(関西圏へ進学・就職→関東圏へ転職、情報通信業→IT企業)

「徳島は閉鎖的な価値観が残っていると感じることがある。実家で親戚と話す、『結婚・出産をしているのが当然』という雰囲気がある。男性の女性に対する価値観も古く、女性が前に出るのを良く思わない発言を聞くときもある。今の会社も製造業で歴史が古いため、男社会だと感じる時がある。徳島の企業も同じ業種であれば、その状況は変わらないと思う。」

(関西圏へ進学・就職、製造業)

2. Uターン者へのヒアリング調査

ここでは、サテライトオフィスや副業、ベンチャー企業など、地域に新しい選択肢が生まれたことでUターンに繋がった4つの事例を対話形式で紹介する。ヒアリングでは県外就職者と同じく、高校、大学、就職後でどのように意識が変容したかを伺った。

(1)徳島に住みながら都市部の企業で働く —サテライトオフィスという選択肢



学校法人神山学園
神山まるごと高等
専門学校
パートナー担当/
Sansan 株式会社
神山まるごと高専
支援室
河野愛美さん

—大学の進学先として、県外を選ばれた理由は何でしたか。

地方で育ったことにコンプレックスがあり、都会の生活に憧れていました。親戚には東京で住む人や東京の大学を卒業した人が多く、話を聞くうちにチャンスがたくさん広がる環境が魅力的に思えたんです。

高校の先生に、「地元にはいつでも帰れるから、一度は都会で経験を積むのもいいかもね」と言われたのも大きかったですね。当時、漠然とですが、大学を出たらまずは東京で就職して、家を買ったり子どもを育てたりするのは徳島がいいかなと考えていました。先生の話聞き自分の考えと一緒に、と思いが強くなった気がします。

—大学卒業後、徳島に戻ろうと思ったきっかけは何でしたか。

大学在学中にコロナ禍を経験したことが大きかったです。

それまでは、徳島で就職活動をするつもりはありませんでした。でも、緊急事態宣言で外出や他県への移動が制限されるのを間近に見て、人が多すぎる都会の生活は大変な面もあると思い始めたんです。「徳島の方が、ゆとりある生活ができるかも」という思いも生まれて、就職活動のときには東京だけでなく、徳島の企業も選択肢に入れるようになりました。テレワークが当たり前になった環境を経験したことも、大きかったと思います。

—現在の勤務先である Sansan 株式会社を選んだ理由について教えてください。

選考が進むにつれ、最終的には東京にあるメガベンチャー何社かと Sansan で迷ってました。ただ、Sansan が神山にサテライトオフィスを持っていることを思い出して、「いつか徳島に帰りたい」という自分の希望を叶えられる会社だと思ったんです。

また、社長の寺田さんが徳島に学校を作るとい話を聞いたとき、両親が教員である自分のバックグラウンドと重なる部分も感じました。採用面接時から、そうした思いを伝え続けて、今に至ります。

—東京と徳島の就職活動を比べて、何か違いはありましたか。

徳島の企業は内定時期が、都市部から半年ほど遅い印象を受けました。

当時の東京では、大学3年の春夏頃からインターンが始まり、早い企業ではすぐ内定が出ていました。徳島の企業の採用が本格化するのには、大学4年の春頃だったので、徳島と東京の企業を並べて比較することができませんでした。大学の同級生もほとんど就職先が決まっていたので、遅れたくない気持ちもあり、結果的には徳島の企業の本選考を受けることなく就職活動を終えることにしました。

また、徳島の企業は情報の入手も難しかったです。大きな企業以外は、採用サイトの情報が古かったり、そもそもサイトを持っていなかったりするところも多かったように思います。都市部の企業の多くは、具体的なキャリアモデルや業務内容に関する情報が充実していたので、そうした点でもギャップを感じました。

—就職活動ではどのようなことを重視されていましたか。

給与や福利厚生も大事でしたが、それ以上に「早く成長できる環境」を重視していました。特に、入社歴に関係なく成果で評価されるか、若手や女性が早期にキャリアアップできるか、という点を軸にしました。

徳島の企業をみると、早期にキャリアアップする機会が少なく、特に女性の若いリーダーが少ないと感じました。もし、即戦力になれる自信があれば、徳島の企業でもすぐに成果を出せるイメージを持てたかもしれません。ただ、コロナ禍でインターンの機会が少なかったことや、学んだ内容が専門的だったこともあり、新卒を多く受入れ、研修制度も整っている都市部の企業に惹かれるようになっていきました。

—徳島に戻ってきて、どのようなことを感じていますか。

入社から2年は東京のオフィスで過ごし、昨年に神山まるごと高専の担当として徳島に戻ってきましたが、やっぱり暮らしやすいです。実家の近くは自然が豊かで、日常的な買い物も困りません。

東京は楽しい場所でしたが、スーパーが遠かったり、公園が少なかったり、落ち着いて暮らすなら徳島の方がいいと改めて思いました。通勤も、東京では満員電車が当たり前でしたが、徳島では車で快適に通勤できるので、生活の質が上がったと感じています。

将来的に子育てをするなら、住み慣れている徳島の方がいいかな、とも思います。ただ、将来的なキャリアアップを望むなら、いつか東京の本社へ戻るべきかもしれないと悩むこともあります。最近では徳島でもスタートアップ企業との関わりが増えてきたので、そうした企業がもっと出てきてくれればと思っています。

(2) 「地元のため」がUターンのきっかけに—地域を盛り上げるため、副業という選択肢



ふっかるコーラ
(クラフトコーラ
製造・販売)
河野江里さん
(本業：銀行勤務)
西岡明美さん
(本業：食品会社の
WEB担当として
勤務)

—大学の進学先として、県外を選ばれた理由は何でしたか。

西岡：高校の頃は地元に着がなくて、「早く出て行きたい」と思っていたので、東京の大学を選びました。昔から英語が好きで、海外にも行ってみたかったので、大学ではアメリカ・シアトルに1年間留学しました。

河野：都会で経験を積みたくて、兵庫の大学を選びました。高校生の頃、「いろいろ」の事例から徳島の地域ビジネスに興味を持つようになり、一度県外に出ても将来は徳島に戻ろうとは思っていました。ただ、徳島で働くことを決める前に、一度外の景色を見てみたい気持ちがありました。

—大学卒業後、徳島に戻ろうと思ったきっかけは何でしたか。

西岡：留学時の経験が大きかったです。シアトルは、中心部に世界的な大手企業が集まっていて、そこから少し離れるとすぐ大自然、という環境でした。「こういうところに住みたい」と思ったとき、「地元もこの環境に近いかも」と感じるようになりました。

ただ、就職活動では、「まだできることも少ないし、タイミングが来たら戻ろう」と思い、関東の企業を選びました。その後、社会人を3年間経験して自身のキャリアを考えた時、「いつか徳島に戻りたいなら、いま帰ろう」と決断し、2022年の終わりに徳島に戻りました。

河野：就職活動時には関西や四国の企業もみていました。ただ、大学での活動や両親の仕事を通して、地元で頑張る企業や経営者の姿を見るうちに近くで応援したいと思うようになったんです。そうした思いで大学卒業後、地元の銀行に入行しました。

—就職活動や転職活動では、どのようなことを重視されておりましたか

西岡：就職活動では、グローバルに働ける環境や、若いうちから裁量権を持てる環境を重視していました。徳島の企業はそうしたことに関する情報発信が少なく、自分に合うかどうか判断するのが難しかったように思います。

転職活動では、初職で積み上げたマーケティングリサーチャーのキャリアを活かせる仕事を探しましたが、全く見つかりませんでした。自分の場合は「とりあえず帰ってみよう」と一歩を踏み出しましたが、家族がいる方や、ある程度長くキャリアを重ねた方であれば難しかったかもしれません。

その後、現在の勤務先が「WEB業務」で求人を出しているのをたまたま発見し、徳島でもマーケティングに関われる仕事があるんだと驚き、応募しました。「地元のための活動にも時間を割きたい」という思いを相談したところ、勤務体系を柔軟に対応してもらえたというのも決め手になりました。

河野：複数の企業や個人と関わり合いながら地域を盛り上げられる点に惹かれ、県内では銀行を中心に選考を受けていました。やってみたい事、給与水準や福利厚生を考え銀行を選択しました。

—活動を始めたきっかけは何でしたか。

河野：日々の生活で地域の人手不足を実感して、「このままでは人口減少で、色々な企業の事業が先細りするかも」という危機感を持つようになったんです。地域に人を呼び込みたいと思い、活動を始めました。

また、「県内外の人が集まり、繋がる場所を作りたい」という目標もあります。「ふっかるコーラ」を媒介に、原材料の生産者さんや、販売をお願いしている地元の商社さんなど、多くの方の力を巻き込む形で、一緒に地域を盛り上げていきたいです。

西岡：私もUターンを考えるようになって初めて、地域課題への当事者意識が芽生えたんです。徳島に戻ってきて、二人でその話をしたときに「地元のために何かしたい」という思いが一致したのが、この活動の始まりでした。

何をするか二人で考えた時、外から地域を見て、初めてその良さに気付いたことを思い出したんです。すだちやみまから唐辛子など徳島の名産品を使った商品を作り、海外や県外で話題になれば、徳島の人も地元に対してポジティブに思ってくれるかもしれないと考えるようになりました。

「ふっかるコーラ」という名前も、「場所に限らずやろうと思えばやれる」という思いを込めています。高校まで地元に着が持てなかった背景には、色んな選択肢や可能性が地元でも叶えられることを知らなかったことがあると思んです。「自分次第で何でもできる」という思いが、商品を通じて県内外の人に届き、地域が良い方向に向かえばと思っています。

—副業として活動をしていく中で、 どのような点に課題を感じていますか。

西岡：「副業」という言葉の定義が難しいですよ。

人口減少が進むにつれ、地域の生活を維持するために、今後は一人が複数の役割を担わなければならないと思います。ただ、例えば地域の清掃ボランティア活動と私たちの活動を比べた時、地域貢献という目的は同じでも、売上が発生するだけで私たちの活動は「副業」と見なされます。

この活動はお金儲けを第一の目的とはしていませんが、地域のために長く続けて発展させていくには、利益が出ることも重要です。自分のためだけの「副業」ではなく、地域のための活動であることを示す別の言葉があればと思っています。

河野：そうした点では、活動を始める時に銀行を辞めるか迷ったこともありました。ただ、「地域に貢献したい」という思いは本業でも副業でも変わりはないので2つを同時に行うことで本業にプラスして地域の課題に向き合えると思ったんです。

この活動を通じて地元が元気になれば、地域と関わりの深い本業にも巡り巡ってプラスになります。また、多様な働き方が出来れば、徳島に戻って力を発揮したい人を呼び込むこともでき、好循環を生み出せると考えました。自分自身も本業に取り組む際、広い視野で物事を捉えられるようになったと感じています。

—徳島に戻ってきて、どのようなことを 感じていますか。

河野：徳島は人が少ない分、PRはしやすいと感じています。実際、活動を始めてすぐに、県内外の多くのメディアに取り上げていただきました。都会だと同じようにはいかなかったと思います。地元の人にも「若い人が頑張ってくれるのは嬉しい」と応援していただき、創業しやすい環境であることを実感しました。

ただ、働く中では人手不足、人口減少を肌身で感じ地方で働くことに危機感を抱いている方も多くいると感じています。地域で頑張る人の雇用環境を手厚く整えていかなければ、そうした人も県外へ出て行ってしまうのでは、と思う時があります。

西岡：本業の方からも応援してもらえて、やりたいことを友達と実現できている今の環境はとてもありがたいです。「徳島に戻る」「やりたいことをやる」というと、大きな決断を感じるかもしれませんが、1か10ではなく、色んな選択肢があると私たちの活動を通して知ってもらえたら嬉しいです。

また同時に、県外へ出てUターンする人や移住してくれる人たちを寛容に受け止める姿勢や活躍できる場所を、地元で作っておくことも大切だと思います。

(3)外に出て地元が一番面白いと気づいた —やってみたい、を応援してくれる場所



NPO 法人
グリーンバレー
移住交流支援
センター
中川麻歆さん

—大学の進学先として、県外を選ばれた理由は何でしたか。

私が学生だった頃、神山町では中学卒業の時点で地域移動の選択をする子がほとんどでした。町内には普通科高校がなく、高校進学のために下宿したり、家族と地域を離れたりする先輩の姿を見て、それが当たり前なのだと受け止めていました。

高校や大学を選ぶときは、「都会に出たい」気持ちもありました。都会への憧れが強く、川で遊ぶより、映画を観たり友達とファストフード店に行ったりしてみたかったです。また、神山で海外の人と触れ合ううちに英語に興味を持ったのもあり、大学進学時には関西の外国語が学べる大学を選びました。

—大学卒業後、徳島に戻ろうと思ったきっかけは何でしたか。

大学に入った頃は、卒業後も関西で働くつもりでした。転機となったのは、大学3年で参加した人口問題を学ぶゼミです。教授から「地方創生において神山は凄い場所だ」と聞き驚きました。外の目線で見初めて、神山の環境が貴重なものだったと気付いたんです。

同じ頃、長期のインターン先を探していて、たまたま神山で面白そうなプロジェクトがあると友達に教えてもらったんです。町役場や神山つなぐ公社^(注)でのインターンも経験し、半分社会人のような形で神山に関わる機会が増えていきました。

そこで、地域のために新しいプロジェクトを進める人や、お店を始める人たちと出会い、神山の新しい側面にたくさん触れるようになったんです。その頃には「都会や海外より神山の方が面白い」と思うようになっていました。

また以前は、神山には町役場か先生のほかに働く選択肢がないと考えていました。ただ、サテライトオフィスや起業、リモートワークなど、多様な働き方をする人と関わるうちに、自分の中で選択肢が増えていったように思います。

—大学在学中にも、町の中と外を繋ぐ取り組みに挑戦されたとお伺いしました。

神山は全体的に「やったらええんちゃう」という雰囲気があって、自分でやりたいことを見つけて挑戦しやすいんです。周りの方からのサポートもあり、大学生向けの町内バスツアーや、中学生向けの「卒業

^(注) 神山つなぐ公社：神山町が2015年に策定した創生戦略「まちを将来世代につなぐプロジェクト」を、スピード感と柔軟性をもって実現していくため、2016年に設立された一般社団法人。

生と語る会」の企画・運営に携わることになりました。

バスツアーは、「県外へ出た同世代にも、今の神山を見て欲しい」という思いから始まりました。町役場の方と一緒に企画し、11人ほどの同級生に、まちの取り組みや新しいお店、サテライトオフィスで働く人を紹介しました。

参加者からは、「若い移住者の方がこんなにいるんだ」と驚く声が聞かれました。それがきっかけか分かりませんが、私の世代は神山に戻ってきた人が多いです。「みんないるから帰ろう」「神山はやっぱり過ごしやすい」という声もあります。仕事は市内で住むのは神山、という子が大半ですが、同世代の友人が近くにいてくれる環境は、神山で暮らす大きな理由の一つになっています。

卒業生と語る会は、「進路を考える前に、町外や県外に出た先輩の思いを聞きたかった」という同級生の声が基になっています。地域の人や先生方と相談しながら、二人で企画しました。

中学生からは、「卒業後こんな進路があったのか」「なんとなく大学へと思ってたけど、すぐ働くのもいいな」など、前向きな感想を貰えました。今も毎年開催していますが、卒業生も中学生を通して「神山のいま」を知ることができ、お互いに成長できる会になっています。

—今の勤務先である NPO 法人グリーン

バレエを選んだ理由を教えてください。

卒業後すぐは徳島市内の会社に入社しました。就職先を考える課程で、スキルがないまま神山に帰っても役に立てないと不安になったんです。ただ、神山での経験が忘れられず、地元の人に相談するうちにお誘いをいただき、グリーンバレエに入ることを決めました。

今は、神山で増える空き家と移住者の方をマッチングする移住交流支援センターで働いています。深刻化する空き家問題に対し、新しい形で解決できないか、皆でアイデアを出し合うこともあります。そこでは年齢や性別は関係なく、何でも相談して進める雰囲気があり、「やったらえんちゃう」の気持ちを、全員が大事にしているように思います。

—徳島や神山に戻ってきて、どのようなことを感じていますか。

やっぱり外に出たからこそ、地元の良さに気付けたと思うんです。「水泳の授業はプールがないから、いつも川で嫌だった」と大学で話すと、都会で育った子から「それ最高じゃん」と言われて驚いたこともあります。自分で移動できる範囲も広がると、遊ぶ場所が周りにたくさんあったことにも気づきました。

一方、日々の暮らしで高齢化と人口減少が加速していることに気付く機会も増えました。神山だけでなく徳島全体も同じ課題を抱えていると思います。ひとつの地域だけではできないことも、お互いに連携しながら解決できるようになればいいなと思います。

(4)帰ってきたら意外と居心地が良かった —外での経験を活かし新たな挑戦を徳島で

地方ベンチャーキャピタル
Aさん

—大学の進学先として、県外を選ばれた理由は何でしたか。

最終的には、夢を叶えやすい環境だったことが決め手になりました。高校1年生の頃、ホームステイで将来のビジョンを持つ

た海外の同世代と出会い、本気で自分の将来を考えるようになったんです。その後、キャリア教育の一環で性格診断を受けたら「コンサル向き」という結果が出て、仕事内容を調べるうち将来の夢が変わっていきました。

ただ、親に相談したところ「徳島はそういう仕事は少ない」と言われ、公認会計士の道も視野に入れながら大学を探すようになったんです。そこで公認会計士の合格実績が良い現在の母校にたどり着きました。以前からキャンパス内の映像をテレビで見て憧れていたのもあり、環境の豊かさや同じ夢を持つ仲間が多いことにも魅力を感じ、入学を決めました。

—大学卒業後、就職先はどのように選ばれたのでしょうか。

公認会計士は2回（短答式・論文式）の試験に合格すると試験合格者となり、その後2年間の実務経験を積み、修了考査に合格すると公認会計士資格が取得できます。就職活動は、論文式試験受験後、合格発表までの間に、監査法人などの定期採用の説明会が開催されるので参加したり、OB・OG訪問を行い、情報収集を始めるんです。合格後はあっという間で、1週間ほどで説明会が実施され、翌週には面接がスタートし、面接から採用までは1週間ほどで決まります。男女平等に働けて、外資系のような自由な雰囲気がある会社を選び、卒業後5年間はそこで働きました。

やりたいと手を挙げればサポートしていただけて、好きだった英語も活かせる環境だったので、入社後も仕事にやりがいを感じていました。

—徳島に戻ろうと思ったきっかけはありましたか。

入社から2年ほどたった頃、ちょうどコロナ禍に入り、親から「帰ってきてほしい」と言われるようになりました。感染が広がる中、親も自分の年齢や今後に不安を感じていたようです。

もともと高校生の頃から、「将来は徳島に帰ってほしい」と言われていて、当時は反発もしました。徳島は自分の夢を叶える選択肢が少ないと思っていたので、自由にさせてほしい気持ちがありました。

でも東京で5年働いて、ある程度経験は積めたという思いがあり、その時はふっと「帰ってもいいかな」と思えたんです。そこから、本格的に徳島に戻ることを考え始めました。

—現在の勤務先を選んだ理由について教えてください。

徳島の企業情報を集めようと、東京にある徳島のUIJターンの就職相談窓口を訪れたのがきっかけでした。直接話を聞くことで、ネットでは手に入らない生の情報を得ることができると思ったんです。その後、紹介してもらった徳島の転職エージェントサイトに登録し、勧められた現在の勤務先に興味を持つようになりました。

徳島の企業を探す中では、税理士法人などもみていました。ただ、コンサルに近い仕事ができ、取引先とも深く関われるという点が選択の決め手になりました。「ベンチャー企業に投資し、一緒に成長させていく」というのは私にとっても新しい挑戦で、魅力的に感じたんです。とんとん拍子で話が進み、窓口を訪れてから1か月ほどで入社が決まりました。

—徳島に戻ってきて、どのようなことを感じていますか。

大学時代も含め9年半ぶりに帰ってみたら、意外と居心地は良かったです。飲食店とか病院も十分ありますし、旅行が趣味なので、週末には鳴門や日和佐や剣山に行ってみたり、意外と近くに楽しめる場所があったんだと驚きました。車があれば好きなどころに行けるのも良いですね。隣県に行けば国際線の飛行機もあるので、交通の不便さも昔よりは改善されていると感じます。これからも、徳島や四国で交通の選択肢が広がれば良いと思います。

また、これまでのキャリアでは将来徳島に帰ることを逆算して行動を決めてきましたが、今は自分が興味を持ったことや面白いと思ったことをやってみて、その先に繋がればと考えています。ただ、そこで「徳島ではできないこと」を見つけた場合は、県外へ出ることを選ぶ可能性もあると思っています。

3. 二つの調査から見たこと

(1) 「いつか戻るかも」という発言の多さ

県外就職者の発言で目立ったのが、「いつか戻るかもしれない」というものだ。その背景を探るため、各時点におけるUターン意向の傾向をまとめた。

まず、高校時点で「徳島に戻るイメージがなかった」と答えた者は17人中わずか5人と全体の約3割だった。

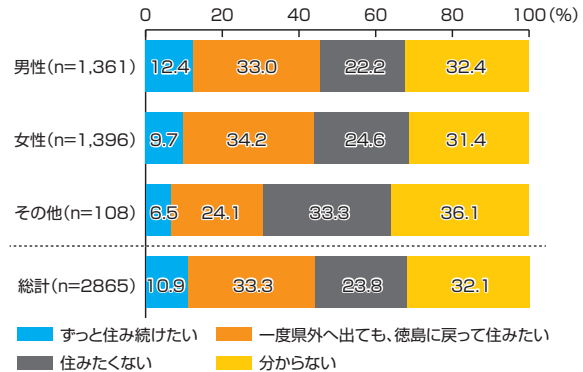
こうした意向は現在の高校生の意向とも共通している。図表3-1、3-2は、2024年7～9月に当研究所が県内の高校生向けに実施した「進路や将来像に関するアンケート」調査から、「将来の居住意向」を性別や進路別にクロス集計したものである（その他詳細は、次号以降にて発表予定）。「住みたくない」と答えた割合は、総計で23.8%、女性計で24.6%、大学進学者で

28.9%と、今回の調査の回答で得た3割という数字と近いものがあった。

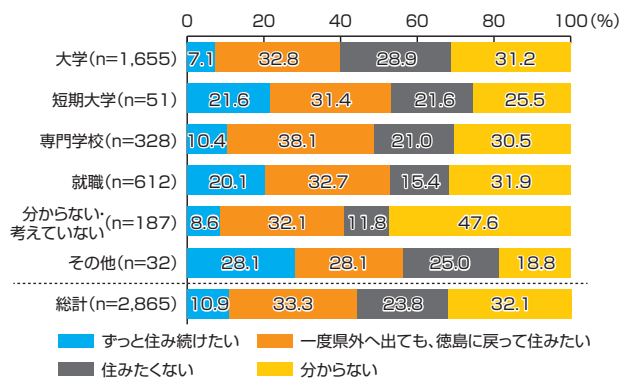
就職活動時点で、「徳島の企業について情報収集をしなかった」と答えた者も17人中5人と、高校時点と変わらず、東京や大阪など都市部の企業を中心に選考を受けながらも、選択肢の中に徳島の企業を残す者が多くみられた。

ただ、現時点のUターン意向では、「生活基盤が出来たため考えていない」「就職や転職時にUターンをした結果、都市部に移動した」「就職後、徳島に戻ることを考えたことはない」と回答した3者の合計が、17人中8人と約半数を占めた。ここから、「就職活動を経て現在に至るまでの間」に、Uターンを選択肢から外す人が増えていることが分かる。

図表 3-1 県内高校生における将来の居住意向（性別）



図表 3-2 県内における高校生の将来居住意向（進路別）



資料：徳島経済研究所で2024年7～8月に実施した、県内の高校2年生向けアンケートより作成

(2) Uターンを考えなくなった理由

なぜヒアリング対象者たちはUターンを考えなくなったのだろうか。その理由を考える鍵として、全体を通して発言が多かった「やりたい仕事がない」「徳島は給与や休日数の水準が低いイメージがある」「年功序列」という点を示したい。

ヒアリングを振り返れば、対象者の多くが、高校から大学を選ぶ際に「偏差値」や「都会への憧れ」、「学びたい内容や将来の夢」を重視していた。しかしそれは、高校時点で「徳島に戻るイメージがなかった」と答えた者が全体の3割しかいないことが示すように、その後のUターン意向に直結するものではなかったのだと考えられる。

実際、対象者の中には、大学進学や就職などのタイミングで徳島の外に出てみて初めて、多くの者が「都会の不便さ」に気付いたり、親の老後や子育てなどライフイベントに考慮したりする形で、徳島に戻ることを検討するケースが複数みられた。また、Uターン者を対象としたヒアリング調査でも同様の発言が多くみられた。

公共交通機関の不便さなどは残るものの、ネット環境が普及し、地方においても買い物や趣味の選択肢が広がったことで、「徳島の良さ」を感じる人は増えているのではないかと推察する。

ただ、就職活動時から現在に至るまでのタイミングで、第一志望でなくても徳島の企業の情報を集め、都市部と比較したときに、「やりたい仕事がない」「給与や休日数の水準が低い」「年功序列で若いうちの裁量権がない」と判断し、Uターンを諦めたり、「老後や親の介護が必要になったら」と先延ばしにしたりしている様子も伺えた。

全ての層が「都市部に出て、都市部で暮らし、都市部で働くこと」を

選ぶのであれば、地域に戻ってきてもらうことは難しい。ただ、本調査で示した「徳島に戻りたい」「いつか戻るかもしれない」と思う人が、戻れる場所を作ることが出来れば、徳島における社会減や人手不足を緩和していくことができるのではないだろうか。

(3) 「徳島が嫌いになった訳ではない」

図表4は、図表3-1、3-2で示した県内高校生の将来居住意向を、徳島にどれだけ愛着があるかという回答と掛け合わせ、人数が多い順に並べたものである。

着目すべきは、「やや愛着を感じる×一度県外へ出て徳島に戻って住みたい」「やや愛着を感じる×(将来の居住意向は)分からない」「とても愛着を感じる×一度県外へ出て徳島に戻ってみたい」と答えた層が、全体の半数以上を占めた点だ。この結果から、進学や就職を控えた高校生たちの多くが徳島に愛着を感じ、戻りたい場所として捉えていることが分かる。

「やや愛着を感じる×住みたくない」と答えた層が2位であることに対しては、調査対象者の発言の中で何度も聞かれた「徳島が嫌いになった訳ではない」という言葉を踏まえると、「徳島は好きだけれども住んだり、働いたりする場所ではない」と判断し、「住みたくない」と答えている実情があるのでは、と推察する。

図表4 徳島への愛着度×将来の居住意向

順位	徳島への愛着度×将来の居住意向	人数 (単位:人)
1	やや愛着を感じる×一度県外へ出て徳島に戻って住みたい	599
2	やや愛着を感じる×(将来の居住意向は)分からない	561
3	やや愛着を感じる×住みたくない	301
4	とても愛着を感じる×一度県外へ出て徳島に戻って住みたい	289
5	あまり愛着を感じない×住みたくない	247
6	あまり愛着を感じない×分からない	219
7	とても愛着を感じる×ずっと住み続けたい	169
8	やや愛着を感じる×ずっと住み続けたい	124
9	とても愛着を感じる×分からない	108
10	全く愛着を感じない×住みたくない	105

この層が
半数以上を
占める

資料：徳島経済研究所で2024年7～8月に実施した、県内の高校生向けアンケートより作成 (n=2865)

また、「住める場所なのか」「働ける場所なのか」を見定めた層は「わからない」を選択しているのだと考えられる。

だとすれば、「一度県外に戻って住みたい」層も、徳島の今後の雇用環境次第では、今回のヒアリング対象者と同様に「戻りたいけど戻れない」状況に陥る可能性があるといえるだろう。

(4)徳島に戻りたい人が戻れる場所になるには

では今後、「戻りたいと思う人」を増やし、地域で受け入れていくには、どのようなことが必要になるのだろうか。

一番早い道は、対象者が求めるような「給与水準」や「休日数」を増やしつつ、「若手の意見も通りやすい体制」を作ることだろう。対象者の発言では、就職や転職先を検討する際に、「東京、大阪、とりあえず徳島も視野に入れた」という層が多かった。ただ、「募集要項を見て地元に戻ることを辞めた」という意見が目立ったのも事実である。給与面や福利厚生面、職場環境を都市部の水準と近づけることで、こうした層の応募を増やすことが可能になると考える。

ただ、都市部に比べて徳島は大企業が少なく、すぐに「給与水準」や「休日数」を改善することは難しいと感じる企業が多いのも実情だ。

一方で、解決策がない訳でもない。発言の中には、「徳島の企業はネット上の採用情報に募集要項しか掲載されていないことが多く、どんな仕事をしているのか、自分がそこで力を発揮できるかイメージすることが難しい」という意見が複数みられた。

こうしたことから、賃上げ余力を生み出すのに時間が掛かる場合でも、給与や休日、若手でも力を発揮できる環境づくりなど、どれか一つずつでも処遇を改善させている様子や、他社にないアピールポイントをネット上でしっかりと情報発信していけば、Uターン者を呼び込める可能性があると考えられる。

また、「知っている企業しか検索していない」

という発言が複数みられたことから、高校卒業時までには就職先の選択肢の一つとして、県内企業の情報を積極的に提供することも重要だと考える。

ヒアリング調査では、高校卒業時に知っていた就職先として、県内は「特定の大手企業や公務員」、県外は「生活に身近な企業や職業」が挙げられていた。その後の就職活動においても県内の就職先候補には同様の先しか入っておらず、それ以外の選択肢は「検索もしていない」者が多かった。給与面などを改善しても、その情報が就職者に届かなければ意味はない。

高校までの具体的な「将来の夢」や「学びたい内容」は、対象者たちの身近なところから形成されていた。給与面などの改善を進めるとともに、高校卒業までに、そうした「身近な存在」になれるかどうか、就職先の選択肢になれるかどうかの鍵を握っている。

(5)多様な選択肢がUターンを促す

今回のヒアリング調査では高校時代に文系であった者の割合が多かった。全国的にも「理系女子」という言葉が使われるほど、理系の女子は少ないが、対象者の言葉の中には「徳島には文系の進学・就職先が少ない」という意見があり、女性が男性よりも地域移動する背景には、こうしたことも関係していると推察する。

そうした点では、Uターン者のヒアリング調査で見られたように、サテライトオフィスや副業、起業、ベンチャー企業支援など、多様な選択肢を地域内に誘致していくことも有効だと考える。「やりたい仕事がない」という意見の解決策の一つにもなるだろう。

県内企業においても、働き方や裁量権の在り方、ビジネスモデルを見直し、多様な意見を受入れる環境を整備することで、そうした層からの応募を増やすことが可能となる。

また、多様性という点で忘れてはならないのが、「共働きを望む声の多さ」である。ヒアリング調査からは、「結婚しても共働きをして、経

済的に自立したい」という声が多く聞かれた。

ニッセイ基礎研究所の天野馨南子氏は「まちがいだらけの少子化対策」(2024)の中で、国立社会保障・人口問題研究所の「出生動向基本調査」を基に、現在の55～71歳と、18～34歳の間で、男女の理想とするライフコースが「専業主婦」コースから「共働き」コースに変化したことを指摘している。また、同調査では女性よりも男性の方が「共働き」を望む結果も出ていた。

男女差に関する代表的な発言では、地方だけでなく都市部でも、企業規模や社内風土によって、個人の能力だけでなく「女性は(結婚や出産で)辞めるから」「子どものために早く帰るのは女性」という無意識の偏見(アンコンシャス・バイアス)によって、女性の働き方やキャリアが制限される様子が伺えた。

また、結婚後のUターンについて「夫の仕事面を考えてもハードルが高い」と、子育てと仕事の両立に不安を抱えて「徳島に戻りたいと思いつながらも戻れない」という発言もあった。

そうしたことから、徳島が都市部に先行して、「働きたいと思える仕事」を増やし、アンコンシャス・バイアスのない男女ともに「共働き」しやすい環境を作ることができれば、都市部から女性が男性と共に徳島へ戻る道が生まれ、と考える。

ただ現状でみれば、男女ともに働きたいと思える仕事や、キャリアを両立しながら共働き出来る環境が十分に整ってないといえる。四国経済連合会は、「四国地域におけるD&Iに関する現状の課題と取組みの方向性(女性編)報告書」(2023)にて、都市部と四国の企業を比較して、四国の企業の方が性的役割分担意識が強いことを明らかにしている。また、県内の人材紹介業者に話を伺うと、近年、女性が男性を連れて戻る「嫁ターン」がUターンの半数近くを占めるようになったが、処遇面などを考慮して再び都市部に戻ったり、選考を辞退したりする場合も多いという。

天野氏は、「強固なアンコンシャス・バイアスによって『人手不足』『採用難』と言いつけている企業が非常に多い」とも指摘する。

若者の声を聞きながら、どのようにすれば「住む場所」「働く場所」の選択肢になれるのか、必死に考え、動いた企業や地域こそ、人口減少や少子化による人手不足を乗り越えられるのではないだろうか。

おわりに

本稿の執筆する中で、大学時代に拝読していた「学歴社会のローカル・トラップ」(吉川徹、2001)の内容を思い出した。

本著は1992年から2001年の間、島根県の高校を対象に進学・就職と地域移動の軌跡を追った様子をまとめている。

吉川氏は、学校や地域が、「郡内選りすぐりのエリート青年層を都市地域に『供出』し、高校卒の地元就職層だけを残す歴史を繰り返してきた」と指摘する。

本著が執筆されてから20年以上が経過しているが、本調査においても「偏差値」によって県外の大学を選び「大手企業」をめざすルートを、親や教師が後押しする様子が伺えた。

「大学卒＝エリート」という見方は、それこそがアンコンシャス・バイアスであると思う。ただ、地域の中で「県外の大学を出て大手企業で就職する＝エリート」「県内に戻る＝非エリート」とする意識は残存していると推察する。

本調査の発言の中にも「戻ってきた人と思われたくない」というものが複数みられたが、実際に筆者が徳島でインターンを経験したときも「関東の大学を出て、なんでわざわざ戻ってくるの」との発言を受けたことがあった。

学歴や職によって人々を分断する意識は地域に残存しており、それが学生たちのキャリア観にまで影響を及ぼしているのだと考えられる。それこそが地域から人を流出させ、都市部

へ向かわせている大きな要因なのではないだろうか。

そして、そうした意識が都市部から戻ってきた人を拒むことにより、地域は自ら、多様な価値観から生まれる成長の機会を失っている。

その結果として、都市部との格差が開く状況が今後も続くのならば、地域はますます「選択

肢のない場所」となるだろう。

学歴や年齢、性別に関わらず、多様な人材を受入れ、その人自身の力を最大限に活かす環境を作り企業の成長に繋げること、そして成長分はしっかりと社員に還元していくことが、地域が生き残る唯一の道だと思う。

<参考文献>

- ・熊本県・熊本県立大学（2022）「女性が住みたくなるスタートアップ事業 調査報告書」
- ・天野馨南子（2024）「まちがいだらけの少子化対策—激減する婚姻数になぜ向き合わないのか」一般社団法人金融財政事情研究会
- ・四国経済連合会（2023）、「四国地域におけるD&Iに関する現状の課題と取組みの方向性 女性編 報告書」
- ・吉川徹（2001）「学歴社会のローカルトラック—地方からの大学進学」世界思想社
- ・梶井祥子 編著（2016）「若者の『地域』志向とソーシャル・キャピタル—道内高校生 1,755人の意識調査から—」一般財団法人北海道開発協会

<参考HP>

- ・天野馨南子（2024）「2023年20代人口流出率にみる『都道府県人口減の未来図』—大半が深刻な若年女性人口不足へ」ニッセイ基礎研究所
<https://www.nli-research.co.jp/report/detail/id=78721?site=nli>（2024年8月2日アクセス）